

たずねびと

朽木 祥作

江頭 路子 絵

すごく不思議なポスターだった。

「さがしています」という大きな文字が、わたしの目に飛びこんできたのだ。いつものように駅の構内をぬけていくときのことだった。

大きな文字の下には名前。名前、だと思ふ。名前だけ、何段も何段も書いてある。

——あんなにたくさんの人を、だれがさがしているんだろう。

家の近くのけいじ板にも、よくポスターがはってある。「迷いねこ」や「迷い犬」、

「青いインコをさがしています」というのもあった。ねこも犬もインコも、いなくなっ
たまま帰ってこなくなつて、だれかがさがしている。

——だけど、あの大きなポスター。あんなにたくさんの人が、いなくなったのかな。
どうも気になつて、ポスターのはつてあるかべまで歩いて行つた。

すると、ポスターのちょうど真ん中へんにあつたのは、
わたしの名前だった。

「楠木アヤ」——かつこの中には年れいも書いてあつた。

(十一さい) ——年れいも同じ。

——びっくり。だれかが、わたしをさがしてるの。

だが、もちろん、そうではなくて、ポスターのいちばん
上には『原爆供養塔納骨名簿』とあつた。だいいち、わた
しの名前は漢字で「綾」と書くのだ。

ポスターには、「ご遺族の方や名前にお心当たりのある
方は、お知らせください」とも書いてあつた。

——死んだ人をさがしてるんだ——原爆が落とされた
のつて、戦争が終わつた年だよ。何十年前のことなのに。

「楠木アヤ(十一さい)」と書かれた所を、また見つめた。
このアヤちゃんには、何十年前からだれも「心当たり」
がないのだろうか。本当に不思議な気がした。



○迷う

原爆

原子爆弾のこと。
一九四五年八月に、
広島と長崎に落とさ
れた。

——どうしてだれも、この子のことを覚えていないのかな。

そのとき、駅前広場のスピーカーから、おなじみのメロディ
チャイムが聞こえてきた。五時だ。わたしはあわてて駅を出た。

それきりポスターのことはわすれてしまった。それなのに、
その晩、夢に見たのだ。

大きなポスターの前に立っている。ポスターいっぱい名前
が書いてあるけど、何という名前なのか読めない。すると、ポ
スターがふわっとめくれ上がって、あごをかすった。と思うと、
名前が、とめどなくポスターをはなれて宙にういた。名前は、
まるで羽虫のようにひよいひよい飛んで、たちまち消えてしま
う。だが、「アヤ」という名前が、ふいにうかんで見えた。はっ
として手をのばしたが、とどく寸前で目が覚めた。

ベッドに起き上がると、紙があごをかすった感触が、まだ
残っているような気がした。わたしは、もう一度ポスターを見

にいくことに決めた。

翌日の放課後、メモに「死没者数」なども写し取ってから、ポスターをながめてい
ると、後ろから頭をちよんとつつかれた。

じゆうくに行くときちゆうのお兄ちゃんだった。

「綾、何してるの。」

わたしは、「楠木アヤ」と書いてある所を指さした。

「びっくりだね。」

お兄ちゃんもポスターを見つめた。

「広島市から来たポスターかあ——」

広島市。となりの県の県庁所在地。世界で初めて原子爆弾が落とされたところ——
わたしが知っているのは、それくらいだ。

お兄ちゃんは、ぱっと時計を見た。

「まずい、おくれる。綾も、さっさと帰れ。」

わたしは、お兄ちゃんに引っぱられるようにして駅の構内をぬけた。



夢

羽虫

ここでは、羽によっ
て飛び回る小さな虫
のこと。

その夜、夕ご飯が終わってからお母さんにポスターの話をした。夢の話はしなかった。ただ、「アヤちゃんのこと、どうして何十年もだれもさがしにこないのかな。」と不思議に思っていたことをきいてみたのだ。

そこへ、お兄ちゃんも帰ってきた。

「綾はね、車で、ものすごくしんけん poster を見てたんだよ。」

お母さんは、少し考えてから言った。

「去年だっけ、お兄ちゃんも平和学習で勉強したとき、広島に行ってみたくて言っていたでしょ。今度のお休みに、みんなでアヤちゃんをさがしに行ってみましようか。」

「行こうよ。」とわたしはお兄ちゃんにせがんだ。広島に行けば、きっとアヤちゃんを見つげられるような気がしたのは、どうしてだったのだろうか。

約束の日、おじいちゃんの具合が悪くなったので、お母さんは行けなくなった。結局、お兄ちゃんと二人だけで広島に向かった。

広島まで在来線で行くと、数時間かかる。広島駅からは路面電車で平和記念公園に

向かった。にぎやかな通りを過ぎて橋の手前で下りると、すぐ目の前に原爆ドームがあった。

秋の空は高く青くすんで、ゆったり流れる川にも空の色がうつっていた。ほね組みがむきだしのドームがその場にあるのが不思議なくらい、明るくて晴れ晴れとした景色だった。

——ここが爆心地なのか。ここで本当にたくさんの人が死んだの——。

お兄ちゃんも、独り言みたいにつぶやいた。

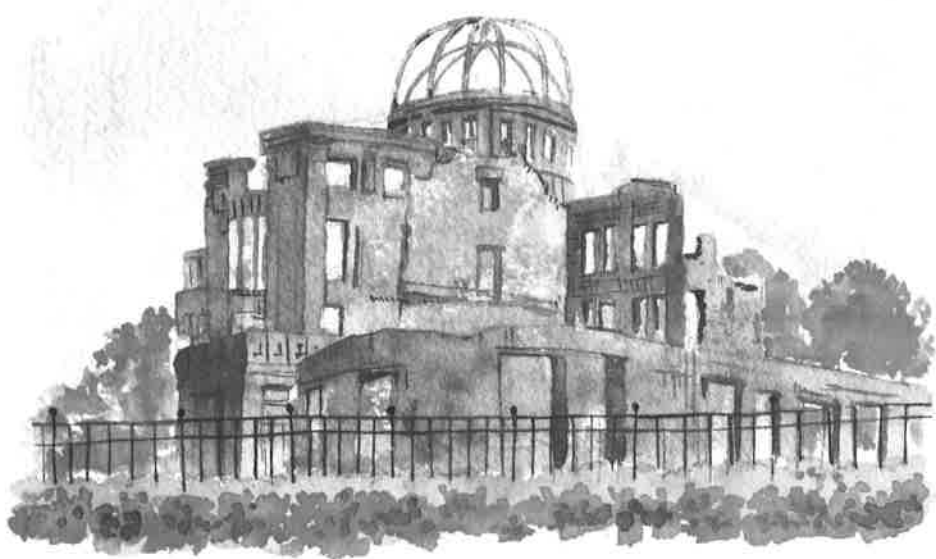
「信じられないよな。水面が見えないくらい、びっしり人が

ういてたなんて。」

その川をわたって、慰霊碑にお参りしてから、まず平和記念資料館に向かった。

資料館を半分も見ても回らないうちに、わたしは頭がくらくらしてきた。何もかも信じられないことばかりだった。

だけど、陳列ケースにならべられた、ご飯が炭化した弁当



路面電車

街の路面にしかれたレールの上を走る電車。

平和記念公園

広島市にある公園。原子爆弾の爆心地のそばにある。慰霊碑、平和記念資料館、追悼平和祈念館などがある。

原爆ドーム

原子爆弾の被害を今に伝えている。世界遺産。



独り言

箱、くにやりとどけてしまったガラスびん、八時十五分で止まったうで時計が、そして焼けただれた三輪車や石段に残る人の形のかげが、「本当なんです。あなたは知らなかったの。」と問いかけてくるような気がした。原爆の閃光や熱風、四千度もの熱のせいで、この持ち主たちは、ほとんどみんな死んでしまったのだ。

——たった一発の爆弾で、こんなひどいことになるなんて。展示の説明板には「この年の終わりまでには約十四万人の人がなくなりました」とあった。八月六日の朝、被爆してすぐになくなった人だけではない。なんとか生きのびた人も、被爆まもない市に入って残留放射線を浴びた人も、核物質をふくんだ黒い雨に打たれた人も、次々になくなってしまったのだと。

「十四万人なんて、想像できないよ。」

「——綾の小学校って、今、全校で何人だったけ。」

「一学年が百人ちよつとだから、七百人もいないかなあ。」

「じゃ、その何倍くらいか考えてみたら。どんなに大勢か、分かるだろ。」

わたしは、朝礼のときの校庭を思いうかべた。ずらつとならんだ頭、頭、頭。

——十四万人って、校庭の頭の数の二百倍だ。小学校二百校分ってこと。そんなにた

くさんの人が、たった一発の爆弾のせいで、この世からいなくなってしまったなんて。

うちのめされるような気持ちのまま、資料館を出た。お兄ちゃんはパンフレットをにらんでいたが、「個人を検索できる祈念館があるみたいだ。」と声をはげまして言った。「身元が分かっている人を整理してあるんだろうけど、いちおう、行ってみようか。」

スロープを下りて入っていく追悼平和祈念館は、ひっそりと静かだった。

原爆でなくなった人たちの情報検索ができる部屋に行くと、大きなかべにモニターがいくつもあって、刻々と変わっていく画面にはたくさんの人々が現れ、たくさんの子どもたちもうつ



石段に残る人の形のかげ

原子爆弾の強烈な光線によって、黒い石段の表面が白く変化したが、人がすわっていた部分だけ光線がさえぎられ、黒いまま残った。

約十四万人

原子爆弾によって死亡した人の数は、現在も正確にはつかめていないが、一九四五年十二月末までに約十四万人が死亡したと推定される。

残留放射線

原子爆弾は、爆発によって大量の放射線を放出した。その後、放射線がしばらく地上に残った。

核物質

原子爆弾の原料となる物質。

個人

声をはげます
自分の気持ちをい
いたたせて、大き
な声を出すこと。

し出された。わたしくらいの子。わたしより小さな子。おさない子どもたち。赤ちゃんまで。

生真面目な顔、すました顔。こちらに向けられたはずかしそうな目。たいていの子どもたちが、かしまって写っている。なかに一まい、口元だけ今にも笑いだしそうな子がいた。どんなおもしろいことをがまんしていたのだろう。わたしはつかのま、その子と見つめ合ったが、画面はすぐに切りかわってしまった。とぎれなく現れ続ける顔をずうっと見つめていたら、気が遠くなりそうだった。でも、どうしても目がはなせなかった。

情報検索用のパソコンをいじっていたお兄ちゃんが席を立て、わたしの横にやって来た。お兄ちゃんもモニターを見つめた。

「この画像や、ここの情報って、遺族から提供されたんだね。」

この人たちには、この人たちのことを覚えているだれかがい

たのだ。

「名前しか分からない人は、ここにはいないよね。どこに行けばいいのかな——」。

二人で受付に行って、駅で見たポスターの話をした。わたしは知らない人に説明をすると、しどろもどろになる。このときも相手は面食らった顔になった。

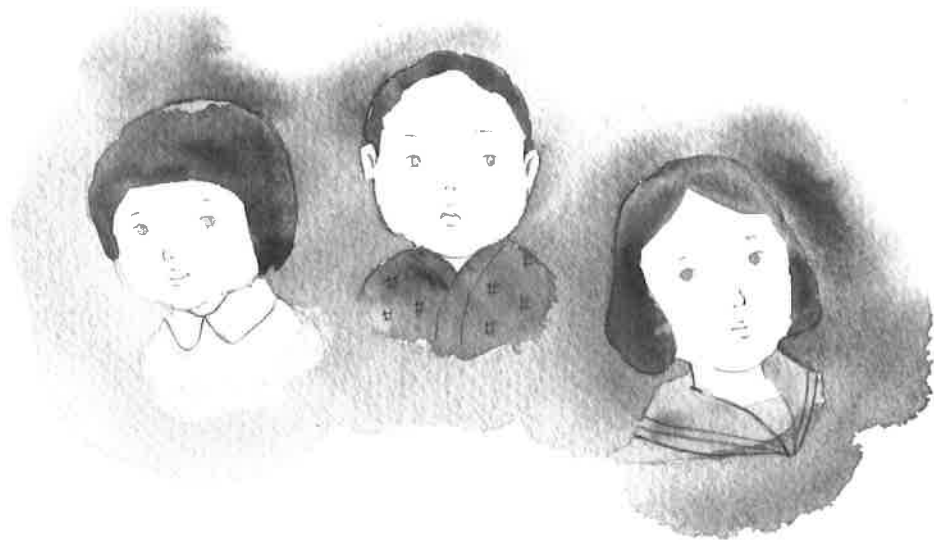
わたしがメモを取り出す前に、お兄ちゃんが「『原爆供養塔納骨名簿』っていうポスターなんですけど。」と説明した。

受付の人はうなずいてマップに印を付けながら、「ここに行ってみてください。被爆者のおばあさんが、たいていこの供養塔の近くにおられます。」と教えてくれた。

原爆供養塔は、小山のように大きな土まんじゅうだった。しばが植えてあって、てっぺんには小さな石の塔が建ててあった。

二人で手を合わせていたら、聞いていたとおり、小さなおばあさんがそばに寄ってきた。手には、ほうきとちりとりを持っていた。おばあさんは、わたしたちがきくより先に口を開いた。

供養塔の土まんじゅうの下には部屋があって、身元の分からない、およそ七万人の



提供

土まんじゅう

土をまんじゅうのようにもり上げて作った、死者を祭る場所。原爆供養塔の土まんじゅうは、直径十六メートル、高さ三・五メートルほどの大きさ。

寄る

◆真面目

人々のお骨と、名前だけ分かっている八百人余りの人々のお骨がおさめてあるという。八百人余り——ポスターからメモに取った数だった。

「ここにさえ入れられなかった人も、^(たくさん)ようけいおりますが。あとかたもの^(なく)う焼かれたり、川を流されていってしまったり。数にも数えられん。」とおばあさんは切なそうになげいた。「せめて名前の分かるとる人らは、いつかだれかがむかえに来てくれはせんかと、市もわたしらもずっとさがしとります。むかえが来て、家族のところにもどった仏さんもおらんことはないが——」。

「何十年も、だれにもむかえに来てもらえないなんて、どうしてなんですか。」

「もしかしたら、家族もみんなぎせいになったのかもしれないね。^(だけど)じゃが、今でも、どこぞで帰りを待つとる人もあるかもしれんと、望みはすてずにおりますかの。」

「——あの、ポスターにね、わたしと名前が同じ女の子がいたんです。わたし、クスノキアヤやっていうんですけど。」

おばあさんの顔がぱつとかがやいた。お兄ちゃんがあわてた様子で付け足した。

「遺族とか、知り合いとかがじゃないんです。ただ年れいまでいっしょだったから、妹がすごく心に残ったみたいで——」。

それを聞くと、おばあさんはだまりこんでしまった。

わたしはこまってお兄ちゃんを見た——おばあさんがかっかりさせてしまったにちがいないと思ったのだ。

だが、そうではなかった。おばあさんは、ほうきとちりとりをわきに置くと、しゃがんで供養塔に手を合わせ、こう言ったのだ。

「アヤちゃん、よかったねえ。もう一人のアヤちゃんがあなたに会いに来てくれたよ。」

やがておばあさんは顔を上げると、しわだらけの顔いっぱいにもっとしわをきぎんでわたしに笑いかけた。目には光るものがあったので、泣き笑いみたいな表情だった。

「この楠木アヤちゃんの夢やら希望やらが、あなたの夢や希望にもなつて、かなうとええねえ。元気で長^(なが)う生きて、幸せにおくらしなさいよ。」

わたしははずかしくなつて下を向いてしまった。そんなことは考えたこともなかったからだ。



別れぎわ、小さなおばあさんは見上げるようにしてわたしの手を取った。

「どうか、この子のことを——アヤちゃんのことを、ずっとわすれんでおってね。」

秋の日は短くて日がしずみかけていた。川土手をゆっくり歩いて橋に向かった。

静かに流れる川、夕日を受けて赤く光る水。

わたしはらんかんにもたれた。お兄ちゃんもせかさなかつた。昼過ぎに、この橋をわたったときには、きれいな川はきれいな川でしかなかった。ポスターの名前が、ただの名前でしかなかったように。

資料館で読んだ説明が思い出された——この辺りは、元はにぎやかな町だった。町には多くの人々がくらしていた。だが、あの朝、一発の爆弾が町も人も、この世から消してしまった。

消えてしまった町、名前でしかない人々、名前でさえない人々、数でしかない人々、数でさえない人々。

だけど、あのおばあさんが言っていたように、わたしたちがわすれないでいたら

——楠木アヤちゃんが確かにこの世にいて、あの日までここで泣いたり笑ったりして

いたこと、そして、ここでどんなにおそろしいことがあったかということ——をずっとわすれないでいたら、世界中のだれも、二度と同じような目にあわないですむのかもしれない。

メモに書いた「楠木アヤ」という文字を、また指でなぞった。その名前に、祈念館でめぐりあった子どもたちの顔が、次から次へと重なった。

そして、夢で見失った名前にも、いくつもいくつものおもかげが重なって、わたしの心にうかび上がってきた。



朽木 祥

一九五七年、広島県生まれ。作家。「光のうっしえ」「風の靴」などの作品がある。